

～愛でる～

# 4 京都、大文字送り火



長谷川 綉二  
HASEGAWA Shuji

NPO法人大文字保存会  
副理事長

夏の夜の京都盆地に映える五山送り火。その内の一つ、大文字送り火は「おしょうらいさん」に対する敬愛と人々の繋がりがこの送り火を支えている。長い歴史を踏まえ大文字保存会が今直面している苦勞と工夫、そして大文字送り火に込める思いとは・・・。

## 大文字送り火の始まり

京都には火を崇める祭事がいくつかあります。私たちが灯す「五山送り火」だけでなく、勇壮なものから厳かなものまで、勇壮の中にも見方によって厳かな鞍馬の「火祭」、花背や広河原の「松上げ行事」があります。

私たちの「大文字」送り火は、昔から「おしょうらいさん（以下、精霊）」を送る火として伝統的に受け継いでおります。私どもの大文字のほかに、「妙法」「舟形」「左大文字」「鳥居形」の五つを8月の盂蘭盆会として灯しますが、古くは、「一」や「鈴」などの文字を模った火も灯されていました。五つの山にはそれぞれの歴史がありまして、各保存会では伝承文化を大事に受け継いでおります。

そもそも大文字送り火はいつ頃から始まったかと言う事をよく聞かれます。それにはいろいろな説や言い伝えがあります。一つは、京都で疫病が流行り、沢山の人が亡くなった時に、その様子を見られた弘法大師が東山にある如意ヶ嶽の都を望む場所（現在の大文字の中心）まで登り、そこで灯明を焚き、読経を唱えたのが始まりだとか。あるいは、足利義政公が嫡子義尚公を亡くされた際、その心を癒すために相国寺の横川和尚が進言されて、義政公の近臣で書道の弟子である芳賀掃部を如意ヶ嶽へ登らせ、人型を模った大の字を白布で描かせ、その後、麓の村民がその布に沿って灯明を灯したとも言われています。

また、公家舟橋秀賢の日記『慶長日件録』には、「夜におよび冷泉家に行く、山々灯を焼く。見物に

東河原に出でおわんぬ」と記述があります。さらに、江戸時代の地誌類などでは鴨川で門火のようなものを焚き、その傍で子供たちが松明を持っていて、その背景に大文字が灯されている様子が描かれていますので、室町後期か江戸初期が起源だと言う方もおられます。こうした起源はいくつかあるのですが、いずれも定かではありません。私自身、祖父や父から多種多彩な話を聞かされてまいりましたが、今もって真実は分かりません。

## 大文字送り火とは

大文字送り火は宗教行事ですかと聞かれます。また、何宗ですかとも問われます。通称大文字山には真言宗開祖の弘法大師・空海が祀られており、火を灯す8月16日には麓の浄土宗寺の僧侶に読経を唱えて頂いており、別段宗旨がどうだと考えたことはありません。



写真1 大文字送り火



写真2 大谷石を用いた火床



写真3 金尾

大文字送り火は、数百年の歴史の間に時代と共に変化し、人々がそれぞれの思いと感性で眺め灯し、自身を見つめる火になっていると思います。そうした人々の思いに答えるため、私たち、大文字送り火を受継いでいる者は、生きていく人々のみならず、現世の努めを終えた人々の精霊に、如何に喜んで頂ける火が灯せるかを考えています。送り火のために、秋には稲穂の事を考え、春にはアカマツ林のこと、梅雨明けには山道や火床の事に力を割きます。この一連の事が無事終わって盂蘭盆会当日の灯明となるわけです。

大文字保存会は、旧浄土寺村の旧家で構成されています。当初は51家が受け継いでいたのですが、現在では48家となっています。昭和30年頃までは、ほとんどが農家であり、畑で麦を作付けしていましたが、社会の変化とともに、現金収入を得るため、男たちは会社勤めに出るようになり、田畑にはアパートやマンションが建ち並ぶようになりました。

## 割り木の確保のために

送り火の火は、割り木を燃やすのですが、割り木を積みあげた火床のまわりには、麦藁を腰巻のように並べます。各火床の火付けに使用する麦藁は、現在その入手もなかなか難しくなっています。これまでは、滋賀県の農家の方に麦藁の確保をお願いしていましたが、近年それも難しくなり、現在ではボランティアを募って、貸し農園で麦の作付けを行って、藁の確保に努めています。



写真4 井桁に組む

写真5 火床作り

割り木は保存会の共有林で調達しております。昭和25年頃までは各家にかまどがあり、風呂の湯も薪で沸かしていましたが、次第に燃料はガスや電気になり、山で薪の採取をする必要がなくなりました。それまでは日々山に入り整備していたのですが、50年の間に山中は荒廃が進み、送り火に必要なアカマツは根腐れによる倒木や、害虫の被害で枯れ木となっていました。50年の歳月、送り火に使うためにアカマツを伐採してきましたが、整備と植栽もせずにいたということは、自然の成り行きと言うよりも、次世代の事を忘れていたとしか考えられません。これも時代であったのか、その年の送り火を灯す事のみを伝承していたからであったと思います。

山仕事をする事の無い今日、ただアカマツを採取する事のみを教えるのではなく、山から得る何か大事な物を伝えていかないと伝承文化は絶えてしまうと思い、21世紀を迎え、山の再生に取り掛かりました。約12haの共有林を7ヵ年計画で整備と植栽をし、林系と林種の調査、京都市内からの景観を行政と協議しながら行っております。

登られた方はご存知だと思いますが、登山道も整備され、通称大文字山の山頂から好天の時は、南は大阪、北は左京区市原、西は愛宕山の麓嵐山まで一望でき、四季を通じて多くの登山者が訪問されます。春と秋は近郊の小学校や幼稚園、保育園の子どもたちが遠足で来られますし、早朝登山や休日の運動をしに来られる近隣の方、また山頂にある大師堂にお参りに来られる方もおり、年間数十万人ともいわれる訪問者がいます。そのため、山道も毎年修復しなくてはなりません。

### 火床の維持管理

火床は当初、堀上だけで行っていたのですが、昭和45年頃から火に対応して、大谷石を二列に埋め込んで作りました。大谷石は10年程前から日本での掘削が減少し、現在では韓国からの輸入になっております。そのため、大谷石以外の方法を考慮しているところです。

火床の設置は、送り火当日の火のためだけでなく、登山者への対応も考慮しなくてはなりません。保存会にとっては神聖な火を灯す場所ですが、登山者には腰掛の場所であり、靴に付いた泥を落とす石、野外料理のかまどとして使われてしまっています。注意書きがあっても「我関せず」です。そのせいで大谷石も取替える期間が年々早くなり、取り寄せの費用が高みます。

明治初期、当時急激な欧化政策をとった京都府より、盂蘭盆会の火を点ける事が禁止されたことがあります。盂蘭盆会の火は個人の焚き火と同様の扱いとし、延焼した時は放火と同じ処罰をする事にしたようです。保存会としては、精霊をお送りする火は焚き火ではないとして、延焼防止を考えて火床周辺一帯の下草を保存会全員で総刈りし、伝統を守る送



写真6 火床

り火を挙げる事を訴えました。このことが市民にも伝わり、なんとか再開できたという歴史があります。今でも晩秋になると下草を刈り取っています。

### 送り火へ向けての作業

2月初旬には、伐採するアカマツの選定にはいります。特に50年以上のもので樹脂をよく含み、松葉を沢山付けているアカマツを選びます。50年以上のもので10本程度でいいのですが、それ以下ですと伐採する本数が増えます。27～28本の薪をまとめて一束とし、それが400束必要となります。火床には単なる割り木だけではなく、一般の人々が先祖の供養、あるいは願い事などを記した護摩木も一緒に燃やします。護摩木には、普通の杉板のものと、割り木を利用したマツ木の2種があるのですが、やはりマツ木の護摩木の方を求める人が多くなって



写真7 妙法

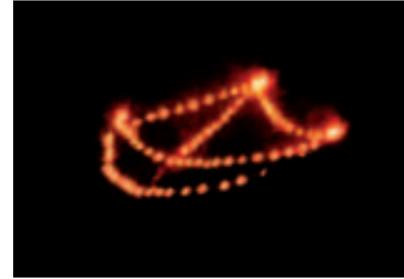


写真8 舟形

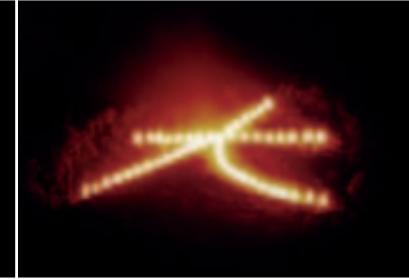


写真9 左大文字

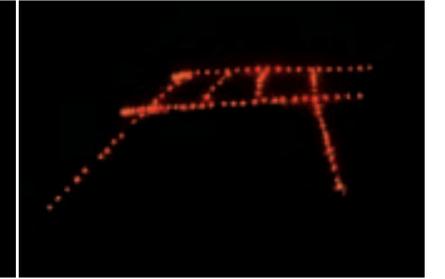


写真10 鳥居形

ます。そのため、400束のうち300束を護摩木としているのです。

護摩木作りも手のかかる作業です。2月に伐採したマツ木を保存会会員とボランティア約12～13人で割り木にし、乾燥させます。乾燥後、束にしてから倉庫に収納するのですが、この作業にはボランティアや一般社会人、学生たち、約100名に来て頂いております。

それが済むと、火床廻りの下草を刈ります。保存会会員はもとより、これにも学生や社会人ボランティアが参加し、手伝ってくれます。近年、7月の日差しは熱中症を起こす位になっていますから、作業時間も休憩時間を多くしないと危険です。8月に入ると山道の補修と、残した作業をしていきます。

### 精霊を迎え、そして送り火へ

一方、保存会の各家では、精霊を迎える準備のために六波羅蜜寺へ行き、仏間飾りをします。お墓参りをして精霊を仏間に迎え、盆会を営むのです。10日余り精霊と歓談し、16日の夕刻、家の男は大文字山に登り薪を組み上げます。祖父、父から教えられた事を守り、一段一段井桁に組み、間に松葉を入れて行きます。約1.2mの高さに積んだら、その上に普通の護摩木を組み上げ、最後に組み上げの周りに麦藁を立てかけます。後は点火の時間を待つだけとなります。山は点火の時間が刻々と迫ると会員の吐く息にも緊張感が漲っているのか、闇夜が止まったように感じます。

各家の点火従事者は、家の代表として精霊を送る火を灯すのですから、赤々と自信の持てる火を考えて組み上げ、点火します。その重圧感が空気を変えていると、私は感じます。そして会長から一斉点火の合図が出されると、会員の手は用意した麦藁の松明に火を灯し、火床に組み上げた薪に点火します。旨く点火できた会員からは笑みがこぼれ、なかなか点火できない会員は焦りで顔が硬直しています。首尾よく点火できた会員は、まだ点火できない火床に

駆けつけ、点火を助けます。

こうして5～10数分後には全火床の火が赤々と燃え上がり、各火床で合掌する姿が見られ、精霊送りが始まります。その後、精霊への読経である妙法が灯ります。舟形が灯り精霊が三途の川を渡って往かれる姿を左大文字が見せてくれます。最後に曼荼羅山の鳥居形が灯り、精霊が鳥居を潜り冥府へ戻られた事を見定め、また一年後にお会い出来ることや、その間の家族、知人の健勝と多幸を祈願し合掌します。

### 私たちの使命と願い

このようにして、やっと盂蘭盆会を終えるのですが、各家では家族がテレビ観賞していて、今年の火は点きが良いの、時間通り点かないのと、下山後、厳しい評価が待ち受けている場合もあります。そうした時には、男たちは苦しい言い訳をしながらも、来年はきっと良い火を点けようと心の中で精霊に詫言のびるのです。

五山送り火のテレビ放映を見ると、鴨川や屋上からご家族で送り火に向かって合掌されている姿を見受けます。私はこうした方々がいる限り、この盂蘭盆会の火を灯し続ける事が使命だと感じるのです。

毎日のように、子供が殺害され、家族が殺し合い、知人を何も感じず抹殺するというニュースの流れる、人の痛みを感じない、人々の繋がりが希薄な時代になりました。私は、このような時代だからこそ五山送り火を眺められる人たちに、人は自然に生まれていること、家族や友との生活の中で生きていること、そして今生きている自身はご先祖が居られたからだと感じて頂くためにも、私たちだけでなく、皆様のご精霊に慶んで貰えるような送り火を灯し続けて参ります。

送り火から、消え去ることの無い灯明を心に移して、いつまでも灯し続けてくださるのが、私たちの願いです。

<写真提供>  
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課